

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2012-202008

(P2012-202008A)

(43) 公開日 平成24年10月22日(2012.10.22)

(51) Int.Cl. F 1 テーマコード (参考)
A 4 1 D 19/00 (2006.01) A 4 1 D 19/00 M 3 B 0 3 3

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 7 頁)

(21) 出願番号 特願2011-69040 (P2011-69040)
(22) 出願日 平成23年3月26日 (2011.3.26)

(71) 出願人 000151221
株式会社島精機製作所
和歌山県和歌山市坂田85番地
(72) 発明者 島崎 宜紀
和歌山県和歌山市坂田85番地 株式会社
島精機製作所内
(72) 発明者 由井 学
和歌山県和歌山市坂田85番地 株式会社
島精機製作所内
Fターム(参考) 3B033 AA07 AC04

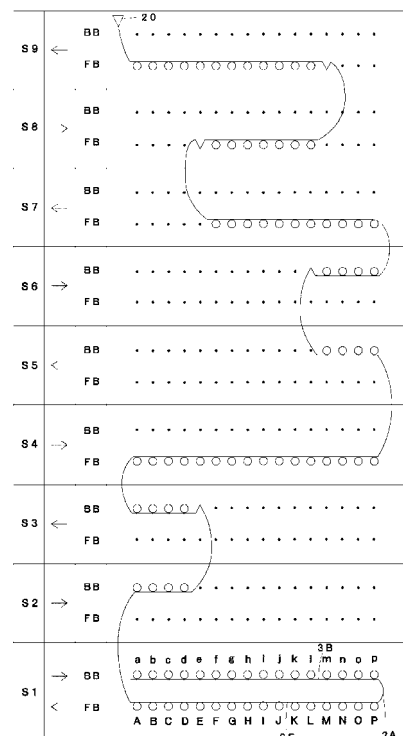
(54) 【発明の名称】 手袋の編成方法および手袋

(57) 【要約】

【課題】本発明は、装着した際には自然に湾曲する状態が保持できて手にフィットして着用感が良く、物を掴む際にも皺が指や掌に発生し難い手袋の編成方法と、その編成により得られる手袋を提供することを目的とする。

【解決手段】横編機を用い、S 2 ~ S 6 に対して、更に広い領域となる掌側の B B の編針 e ~ l で編成しないことで、指袋 2 の編幅中心付近の掌側の編目を、両端部に比べてより少なくしている。更に、S 1 2 ~ S 1 4 では、S 7 ~ S 9 に対して狭い領域となる甲側の F B の編針 E ~ J で編成する。その編成により、指袋 2 の編幅中心付近の掌側の編目は、ほぼ対称となる形で両端部に比べて多くなる。ゲージが細かく、編幅が広く、編目が多ければ、更に編成を繰り返す。

【選択図】図 2



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

少なくとも前後一对の針床を有する横編機を用い、掌側の編目と甲側の編目が端部で連結されて筒状に編成される関節部を備える複数の指袋と、該指袋と繋がり筒状となる四本胴部を備える手袋の編成方法において、

関節部では、少なくとも甲側の編幅の一部を、甲側の編幅中心が掌側の編幅中心に対してウエール方向の編目数が多い状態に編成する工程と、掌側と甲側を連結する状態で筒状に編成する工程とを組み合わせることを特徴とする手袋の編成方法。

【請求項 2】

前記関節部は四本胴部の位置にあって、少なくとも甲部の一部を編成し、甲部の編幅中心が掌部の編幅中心に対してウエール方向の編目数が多い状態とすることを特徴とする請求項 1 記載の手袋の編成方法。

10

【請求項 3】

横編機を用いて編成され、複数の指袋と該指袋とが繋がった四本胴部を有する手袋において、各指袋の関節部は、少なくとも甲側の指袋の一部で編目を編成し、甲側の編幅中心に対して掌側の指袋の編幅中心では、ウエール方向の編目数が少ない状態で指袋の掌側と甲側を連結され、該各指袋に繋がる四本胴部を、掌部と甲部の編目が連結する状態で形成していることを特徴とする手袋。

【発明の詳細な説明】

20

【技術分野】**【0001】**

本発明は、手袋の編成方法および手袋に関する。

【背景技術】**【0002】**

従来、手袋は掌側、甲側ともに扁平状に編成されており、装着すると指関節に皺や弛みが発生していた。特許文献 1 では、甲側と掌側全体または各部の度目が相違するように編成されているため、装着した際には自然に湾曲する状態を保持でき、従来のように長時間使用していても手指が疲労しないことが示されている。

【先行技術文献】

30

【特許文献】**【0003】**

【特許文献 1】実登 3 0 5 6 9 7 4 号公報

【発明の概要】**【発明が解決しようとする課題】****【0004】**

本発明の目的は、編目の大きさの違いによる特許文献 1 とは異なる方法で、装着した際には自然に湾曲する状態が保持でき手にフィットして着用感が良く、物を掴む際にも皺が指や掌に発生し難い手袋の編成方法と、その編成方法により得られた手袋を提供することである。

40

【課題を解決するための手段】**【0005】**

本発明は、少なくとも前後一对の針床を有する横編機を用い、掌側の編目と甲側の編目が端部で連結されて筒状に編成される関節部を備える複数の指袋と、該各指袋と繋がり筒状となる四本胴部を備える手袋の編成方法において、関節部では、少なくとも甲側の編幅の一部を、甲側の編幅中心が掌側の編幅中心に対してウエール方向の編目数が多い状態に編成する工程と、掌側と甲側を連結する状態で筒状に編成する工程とを組み合わせることを特徴とする。

【0006】

また本発明は、前記関節部が四本胴部の位置にあって、少なくとも甲部の一部を編成し

50

、甲部の編幅中心が掌部の編幅中心に対してウエール方向の編目数が多い状態とすることを特徴とする。

【 0 0 0 7 】

さらに本発明では、横編機を用いて編成され、複数の指袋と該指袋とが繋がった四本胴部を有する手袋において、各指袋の関節部は、少なくとも甲側の指袋の一部で編目を編成し、甲側の編幅中心に対して掌側の指袋の編幅中心では、ウエール方向の編目数が少ない状態で指袋の掌側と甲側を連結され、該各指袋に繋がる四本胴部を、掌部と甲部の編目が連結する状態で形成していることを特徴とする手袋。

【発明の効果】

【 0 0 0 8 】

本発明では、各関節部で、少なくとも甲側の編幅の一部を、甲側の編幅中心が掌側の編幅中心に対してウエール方向の編目数が多い状態に編成し、掌側と甲側を連結する状態を組み合わせることで、甲側が膨らんで掌側に曲がり、手指を自然な状態に湾曲させることが可能となる。また、物を掴む際に更に曲がる関節部の掌側では、皺が発生し難い。

【 0 0 0 9 】

また本発明では、前記関節部が四本胴部の位置にあって、少なくとも甲部の一部を、甲部の編幅中心が掌部の編幅中心に対してウエール方向の編目数が多い状態に編成する。その為、物を掴んだ際にも皺が発生し難く、安定して物を掴むことが出来る。

【 0 0 1 0 】

また、本発明による手袋は、物を掴む際に曲げる関節部でウエール方向の編目数を少なくしていることで、皺が発生し難い。

【図面の簡単な説明】

【 0 0 1 1 】

【図 1】本発明の実施例として示す手袋 1 の概略図である。

【図 2】本発明の実施例として示す手袋 1 の指袋 2 A の編成図である。

【図 3】図 2 に続く本発明の実施例として示す手袋 1 の指袋 2 A の編成図である。

【図 4】本発明の実施例として示す手袋 1 の四本胴部 4 の編成図である。

【図 5】本発明の実施例として示す手袋 1 の指袋 2 A の関節部において、ウエール方向に差を設ける変形例を示す概略図である。

【発明を実施するための形態】

【 0 0 1 2 】

以下、本発明の実施例として、手袋 1 の説明を行う。編成に使用する横編機は、前後一对の針床を備えた 2 枚ベッド横編機であり、後針床 B B が前針床 F B に対してラッキング可能で、針床の上方に複数の給糸口を有するものである。また、編成される手袋 1 はすべて平編みで編成する。編成図では、説明の便宜上、針数を実際の編成よりも少なくしている。

【実施例】

【 0 0 1 3 】

図 1 は、本発明の実施例として示す手袋 1 の概略図である。(a) は手袋 1 の甲側を、(b) は手袋 1 の掌側を、(c) は手袋 1 の側面を示す。手袋 1 の編成は、各指袋 2 を指先から順次編成し、甲部 6 と掌部 7 が両端で連結された四本胴部 4、5 本胴部 5 を編成する公知の方法で行う。実施例では、図 1 の人差し指用指袋 2 A と四本胴部 4 を用い、本発明により関節部 3 (甲側関節部 3 F、掌側関節部 3 B) を自然な状態に湾曲させる編成方法と、掌部 7 に皺が発生し難いようにする編成方法の説明を行う。

【 0 0 1 4 】

図 2、図 3 は、本発明の実施例における手袋 1 の人差し指用指袋 2 A の編成図である。手袋のため指袋 2 は、図 1 で示す人差し指用指袋 2 A 以外の残りの 4 本についても同様の編成を行う。編成図では、図中左側の数字は編成ステップ (S) を示し、左右方向の矢印は編成方向を示し、F B は前針床を、B B は後針床を示す。大文字の A ~ P は F B の編針

10

20

30

40

50

を、小文字の a ~ p は B B の編針を示す。また、丸印はその編成ステップで形成される編目を、V 印はタック目を示す。尚、その編成ステップでの編成に関係せず、編針に係止されたままの編目については図示を省略する。

【 0 0 1 5 】

図 2、図 3 で示す編成ステップ S 1 ~ S 1 6 について説明する。図 2 の S 1 では、手袋 1 の人差し指用指袋 2 A の第 1 関節での筒状編成を示し、F B で甲側関節部 3 F、B B で掌側関節部 3 B を編成する。給糸口 2 0 をキャリッジ（不図示）により左右に移動して、B B の編針 a ~ p と、F B の編針 P ~ A で新たな編目を形成する。つまり、人差し指用指袋 2 A の掌側と甲側を連結する状態で筒状に編成する。

【 0 0 1 6 】

S 2 では、右方向に B B の編針 a ~ d で編目を形成する。S 3 では、左方向に F B の編針 e にタック編成を行い、B B の編針 d ~ a で編目を形成する。S 4 では、右方向に F B の編針 A ~ P で編目を形成する。S 5 では、左方向に B B の編針 p ~ m で編目を形成する。S 6 では、右方向に B B の編針 l にタック編成を行い、B B の編針 m ~ p で編目を形成する。B B で折り返し、その間の掌側の B B の編針 f ~ k で編成を行わず、甲側では、編幅全ての編目が編成される為、指袋の編幅中心において掌側に対し、ウエール方向の編目数が多い状態となっている。

【 0 0 1 7 】

S 7 では、左方向に F B の編針 P ~ F で編目を形成する。S 8 では、右方向に F B の編針 E にタック編成を行い、F B の編針 F ~ L で編目を形成する。S 9 では、左方向に F B の編針 M にタック編成を行い、F B の編針 L ~ A で編目を形成する。甲側の F B の編針 E ~ M 間において増し目を行い、編針 E ~ M 以外の編針で編成される編目に対し、ウエール方向の編目を 2 コース分多くしている。甲側は、ここでも指袋の編幅中心において、掌側に対してウエール方向の編目数が多い状態となっている。

【 0 0 1 8 】

図 3 の S 1 0 では、右方向に B B の編針 a ~ c で編目を形成する。S 1 1 では、左方向に F B の編針 d にタック編成を行い、B B の編針 c ~ a で編目を形成する。S 1 2 では、右方向に F B の編針 A ~ J で編目を形成する。S 1 3 では、左方向に F B の編針 K にタック編成を行い、F B の編針 J ~ D で編目を形成する。S 1 4 では、右方向に F B の編針 E にタック編成を行い、F B の編針 F ~ P で編目を形成する。更に左方向に B B の編針 p ~ n で編目を形成する。S 1 5 では、右方向に B B の編針 m にタック編成を行い、B B の編針 n ~ p で編目を形成する。掌側では、編幅の一部となる B B の編針 e ~ l で編成を行わずにウエール方向の編目を少なくし、甲側では、F B の編針 D ~ K 間において増し目を行い、編針 D ~ K 以外の編針で編成される編目に対し、ウエール方向の編目を 2 コース分多くしている。掌側と甲側のウエール方向の編目差が大きくなり、指袋 2 がより湾曲する状態となる。

【 0 0 1 9 】

掌側の B B の編針 e ~ l で編成を行わないことで、指袋 2 の編幅中心付近の掌側の編目を、両端部に比べてより少なくしている。更に、S 1 2 ~ S 1 4 では、甲側の F B の編針 D ~ J で編成して増し目する。その編成によりウエール方向の編目が両端部に比べて多くなる。ゲージが細かくて編幅が広く、編成する編目が多ければ、作用効果が少ない為、更に同様の編成を繰り返して作用する編目を増やし、突っ張りや皺を減少させる。S 1 6 では、S 1 と同様に F B の編針 P ~ A と、B B の編針 a ~ p で編目を形成し、指袋の掌側と甲側を連結して筒状に編成する。

【 0 0 2 0 】

本実施例では、掌側で折り返して編成し、指袋 2 の掌側で編成する編目を増減することで、糸素材による伸びや編幅の目数に応じた編目の増減調整が可能となる。本実施例では、コース方向の編目数の増減の差を 1 目としたが、2 目、3 目と段差を広くすれば、角度が緩やかになり指袋の曲がりも小さくなる。

【 0 0 2 1 】

10

20

30

40

50

図 4 は、本実施例における手袋 1 の四本胴部 4 の編成図である。四本胴部 4 の一部で編目を編成せず、甲側と掌側の編目に差を設けることを編成ステップ S 1 ~ S 10 で説明する。S 1 では、F B で甲部 6、B B で掌部 7 を編成する。給糸口 20 を左右に移動して、B B の編針 a ~ p と、F B の編針 P ~ A で編目を形成する。つまり、四本胴部 4 を、甲部 6 と掌部 7 を連結する状態で筒状に編成する。

【 0 0 2 2 】

S 2 では、右方向に B B の編針 a ~ h で編目を形成する。S 3 では、左方向に B B の編針 i にタック編成を行い、B B の編針 h ~ a で編目を形成する。S 4 では、右方向に F B の編針 A ~ P で編目を形成し、左方向に B B の編針 p ~ m で編目を形成する。S 5 では、右方向に B B の編針 l にタック編成を行い、B B の編針 m ~ p で編目を形成する。S 6 では、左方向に F B の編針 P ~ A で編目を形成し、右方向に B B の編針 a ~ f で編目を形成する。S 2 ~ S 6 では、B B 側で折り返し、その間の掌側の B B の編針 j , k で編成を行わないようにしている。

【 0 0 2 3 】

S 7 では、左方向に B B の編針 g にタック編成を行い、B B の編針 f ~ a で編目を形成する。S 8 では、右方向に F B の編針 A ~ P で編目を形成し、B B の編針 p ~ k で編目を形成する。S 9 では、右方向に B B の編針 j にタック編成を行い、B B の編針 k ~ p で編目を形成する。S 10 では、左方向に F B の編針 P ~ A で編目を形成する。S 7 ~ S 10 では、編成を行わない領域が S 2 ~ S 6 に対して、右から左方向に向けて移動している。同様の編成を繰り返すことで、四本胴部 4 において物を掴む際に皺が発生しやすい領域の編目を、位置をずらしながら減らしている。物を掴む際に掌部 7 の皺も発生し難くなる。突っ張りやすい素材などでは、更に甲部 6 に増し目して甲部 6 と掌部 7 の差を大きくすれば良い。

【 0 0 2 4 】

図 5 は、本発明の実施例における手袋 1 の指袋 2 A の関節部 3 において、ウエール方向に差を設ける変形例を示す概略図である。図中、F B は前針床で甲側を、B B は後針床で掌側を示し、各針床で編成する領域を示す。編成する領域はハッチング部分で示す。図 5 (a) では、掌側の編成を一旦休止し、その間に、甲側で、指袋の編幅中心を境に略対称の形で折り返し編成を行う。甲側に編目を多く形成し、膨らみ部分としている。また、図 5 (b) では、掌側の編成を一旦休止し、その間に、甲側で、指袋の編幅中心を境に略対称の形で折り返し編成を行って、甲側に編目を多く形成し、膨らみ部分としている。尚、ウエール方向に差を設ける手段として、図 5 では前後一方の編目列 (F B 側) のみ編成する形で、編目差を設けているが、本実施例では、前後一方と他方の編目列 (F B 側と B B 側) を編成しながら、ウエール方向に編目差を設けている。

【 0 0 2 5 】

尚、本実施例では、手袋 1 は平編み組織での編成を示しているが、甲部などで、コース方向にミス編成をニット編成と交互に行い、メッシュ状にして、通気性を高めても良い。また、コーティング手袋の原手として使用しても良い。例えばゴム系の樹脂コーティングを使って手袋を固めると、編系による伸びがなく、一般的な手袋の形状では手指が直線的な為、曲げによる皺や突っ張りが発生し易い。自然に手指の湾曲が形成される本発明による手袋では、物を掴む際に更に加わる関節部 3 の曲がりが必要なくすみ、皺や突っ張りが発生しにくい。

【 0 0 2 6 】

さらに本実施例では、指袋の先端を開口しても良く、親指を除く指に対して適用するなど、部分的な適用でも良い。また、必要な手袋の形状にする為、それぞれの関節部 3 に対し、個別に指袋の曲がる度合いを調整しても良い。例えば、親指から小指に向けての各指袋における関節部 3 への本件の適用を徐々に拡大 (実施回数、曲げ角度) していくことで、人差し指の曲がり浅く、小指が最も指袋が曲がった形となり、物を掴む際にしっかりと物を掴むことができる。さらにまた、編成する方向は指袋 2 から手首方向であるが、逆方向にしても良い。本発明の主旨に逸脱しない範囲において、実施が可能である。

【符号の説明】

【 0 0 2 7 】

- 1

2

3

4

2 0
- 手袋

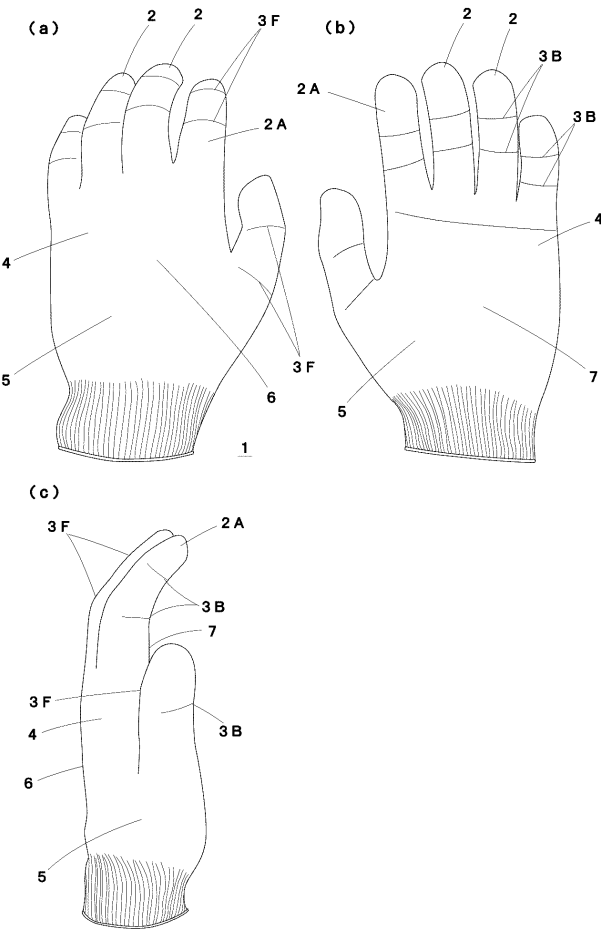
指袋

関節部

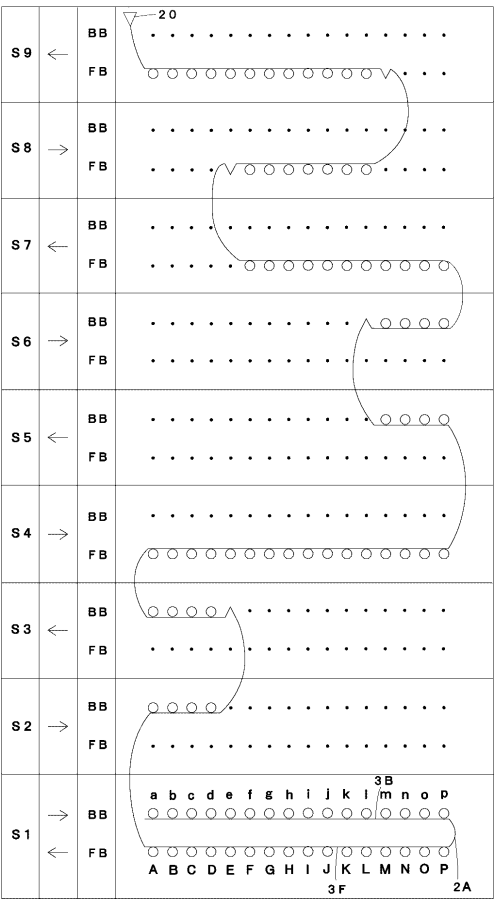
四本 胴部

給糸口

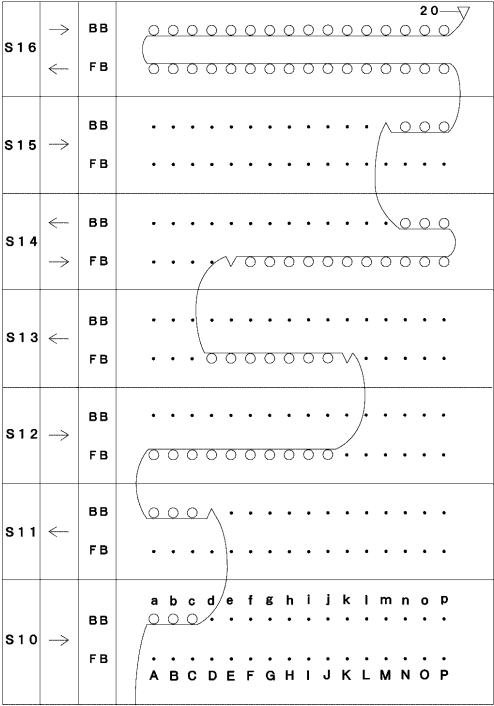
【 図 1 】



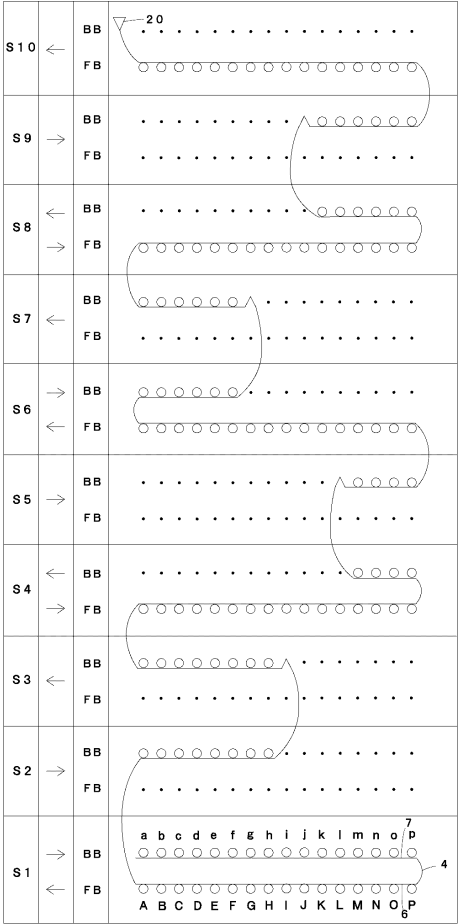
【 図 2 】



【 図 3 】

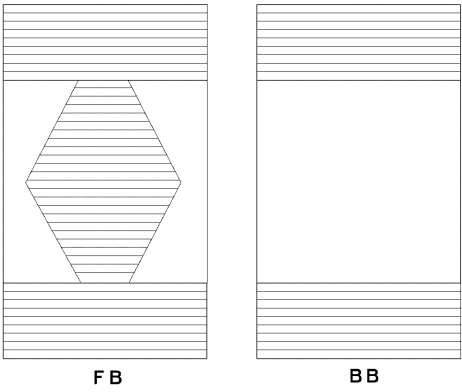


【 図 4 】



【 図 5 】

(a)



(b)

